

2008年4月28日発行

タムタム来る — アフリカ版「わんわん物語」

国連児童基金(ユニセフ)コンゴ民主共和国東部事務所(ゴマ)
教育専門担当官 青木佐代子

アフリカはコンゴ民主共和国東部、紛争下のゴマに到着して4ヵ月後、仔犬のタムタムが我が家にやってきました。コンゴ東部は『紛争の巣』と呼ばれており、番犬でも育てようと思いつき「仔犬が欲しい」と言つたら、2日後にその辺の人がその辺から拾つてきたのがタムタムでした。見るからに完璧な雑種。雑種なら風土病に強いのでまず大丈夫。血統証付きの犬などは、病原菌で一杯のアフリカではすぐに死んでしまうので、初対面で即お買い上げ。10ドルなり。因みに、小学校の先生の月給は60ドルですが、それも滅多に支払われません。

タムタムは、汚くてやせ細ったねずみのような仔犬でした。事務所のダンボールに入れて連れて帰ったところ下痢をしてよたよたしているのです。早速獣医さんを呼びました。こんな僻地にも獣医さんが一人いて、しかも犬が怖いとか、患者はほとんど犬だろうに困ったものです。診断は赤痢！ これは大変といつも9時ぐらいまで仕事をしていますが、5時に慌てて帰宅。タムタムを隔離。棚から世界保健機構(WHO)が使用している薬剤ORSを取り出しました。家の前のキブ湖(コレラ菌がいっぱい)から電動ポンプであげた水を煮沸消毒し、それにORSを溶かし、針を抜いた注射器で無理やり口をこじ開け、コップ半分ほどの分量を飲ませました。タムタムは涙目。そのあと30分おきに飲ませつづけて3時間くらいして、お粥を作つてみましたが、またしても「これ嫌い」と拒否。選り好みしている場合じゃなかろうに…。

2日後、少し元気になって、コップに入っていたORSを自発的に飲むようになり、お粥も少し食べました。嬉しそうに尻尾をパタパタするタムタムをみて、ORSって本当に効くんだな、と納得。ORSは今でも避難民キャンプなどで極度に衰弱した人々のために使われています。命を救うこの袋の値段は一袋10セント。衰弱のひどかったタムタムは、あの日ORSで治療しなかったら次の日には死んでいたことでしょう。



3日後。念のためにもう一日隔離。でもお粥もあまり食べてない。様子を見に行つた同居人がキブ湖で捕れた小さな魚が入つたお粥を見て「これ、ますそう」。そして、生の牛肉の固まりを切つて持つていくと、タムタムはピョンピョン跳ねた上、ガツガツと食べ始めたのです。コンゴの人々は貧しさのため、肉はほとんど食べられません。蛋白質は乳幼児の脳の正常な発達に必要不可欠。必要な時期に必要な栄養素を摂取できないことで、脳の発育が十分でないために知能が低い子どもであるように見られてしまうことがあります。話しかけても反応が鈍いコンゴの子ども達がいますが、それは彼らのせいではない可能性が大きいのです。

5年間続いたコンゴ民主共和国の内戦は2003年に停戦条約が結ばれたものの、東部の状況は2007年、再び悪化しました。先日も、民兵の一部がゴマの南部にある村を真夜中に襲い、30人ほどの村人が無残に殺されました。そのたびに、恐怖に怯えた数千から数万人の人々が、両手にもてるだけの荷物をかかえて数日から二週間ほども歩いて村を逃れてきます。現在、北キブ州では人口の2割にあたる50万人が紛争による紛争による殺人、略奪、強姦、強制的な従軍を逃れ、自分たちを受け入れてくれる村の庭先

や空き地に枯れ草でミノムシのような小屋をしつらえ、食料や水の配給を待ちながらのその日暮らしをしているのです。

コンゴ紛争のための和平会議は今もすすめられています。一日も早く紛争が終わることを祈りたいと思います。誰もが暴力や恐怖のために故郷を追わることなく、迫り来る命の危険のために国外退避などすることなく、タムタムが庭をかけまわるうれしそうな姿を見続けることができるためにも。

青木佐代子さんのプロファイル：

埼玉県出身。「アンデスの声」リスナー。NGO(エクアドル・米国勤務)。世界銀行(米国勤務)。ユニセフ(ペルー・米国・インドネシア・コンゴ民主共和国勤務)。

エクアドル滞在中「赤道で逢いましょう」番組に数回出演。アンデスの山、音楽、ジャングル体験、インカ・トレイルとマチュピチュ遺跡、北極体験などを語る。毛利衛と仲間たち著「赤道に降りた宇宙飛行士 エク！」(講談社)のコーディネーター。

【注】ORS(Oral Rehydration Salt、経口補水塩)は、食塩とブドウ糖を混合したもので、医療設備が整っていない所や乳幼児など点滴治療が困難な場合に、主に下痢、嘔吐、発熱などによる脱水症状の治療に用いられる薬剤。

青木佐代子さんとの対談(2006年シカゴで収録)を5月に再放送します。インドネシア篇(3日)、アマゾン篇(10日)、もし世界が100人の村だったら…子供篇(17日)

HCJB日本語放送担当

在室 尾崎一夫

HCJB日本語放送(オーストラリア送信)：

放送日時： 毎週土曜日、日曜日
日本時間 0730 – 0800 (2230 – 2300UTC)

送信周波数： 15525 kHz (19mb)

受信報告書の宛先： 〒169-0073
東京都新宿区百人町1-17-8
淀橋教会HCJB係

(※返信用に80円切手を2枚同封して下さい)

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://japanese.hcjb.org/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「フォーラム」(<http://japanese.hcjb.org/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「メールマガジン e-La Voz らいぶらり」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録も[HCJB日本語放送](#)までメールにてお知らせください。なお、メール・リストは配信先メール・アドレスのみで管理されていますので、配信先変更をご希望の場合には、現在登録されている配信先も併せてお知らせください。



Copyright © 2008 by HCJB Global. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://japanese.hcjb.org/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
